

## 筑波大学への期待 退職職員からの提言

植田 豊

元筑波大学人文・数理等教育研究支援室室長補佐  
現科学技術振興事業団事務参事

昭和48年10月1日に創立開校した翌年の4月に事務局職員として、およそ開学と同時に就職し、30周年を迎える本年3月に定年を迎え、退職した事は、まさに、この30年間は筑波大学と共に歩み、筑波大学と共に、一区切りをつけたことは光栄であったと実感している。

筑波大学に就職した当時は、昼間はあちこちで道路や建物の建設工事の真最中で、学園都市の至る所でブルドーザーの騒音が鳴り響き、なんとなく我々の気持も活気に満ちあふれ、夜ともなるとあたり一面がシーンと静寂に一変していたものである。

これからどんな都市や大学ができるのだろうと期待に夢をふくらませ、皆が明るい笑顔で職場に向かっていった事がなつかしく思い出させる。

私は筑波大学では在職期間の大半を経理畑を歩んできた。

開学当時は、何をしていたのか解らず、

どう処理していけばいいのか先輩達に聞いても、なにしろ新しくできる大学の為、他大学から転勤してきた人達と地元で採用された人ばかりなので、確かな答えをいただく事も出来ず、とまどいと不安の連続であった。

仕事には心身共に非常に疲れ切っていたが、エネルギーに前向きに取り組んでいた。

さて、私の筑波大学での30年間で一事務局職員として振り返り、事務側からみた苦言、提言を述べながら、筑波大学の今後の発展に期待したい。

とにかく、この30年間という期間、事務の見直し、事務組織等の在り方について、いつもの事ながら、議論、討論、そのため会議、打合せの連続に明け暮れた。

その結果、何が改善されたのか、残念ながらぐるぐる空ら廻りして、進んだり、戻ったり目に見えるものは、それ程無かったの

ではないだろうか。この時間の浪費は相当なものである。原因は色々あるが、最も強く感じた事は、上司が交代する度に視点が変わって、一貫性がなかった事も一因である。

筑波大学へ転勤されてきた人達は、せいぜい2~3年で転勤していってしまい、議論を重ねて、いよいよ集約という段階に、新しい人が、また最初から、問題点を出し検討するという事が多かった。

また、学内でも絶えず人事異動が行われ、折角、教官から信頼を得、学群、学系等の種々の問題を検討している最中に突然異動の内示を受け、教官からも不満の声が多かった。

これでは、職員も真剣に問題に取り組もうとする心構えは持てないであろう。色々な業務を体験する事は必要ではあるが、これからはエキスパートを育てる方が、大学の運営において、今後はむしろ必要となっていくのではないだろうか。

「この業務については、あの人に聞けば」という人を育てていけば良いと思う。職員ひとりひとりが、それぞれ専門職になり全体的に大学が、良い方向に発展出来れば良い。そして職員に自信と落ち着きを与え、じっくり取り組む環境を作る事を希望する。

そのうえ、一生懸命努力し、目的を達成した者に、夢と希望を与えてほしい。今国

会で審議中の国立大学法人法案は、間違いなく成立する。明治時代の帝国大学、戦後の新制大学発足に続く今回の法人化は、国の権限がすべて移譲される。大学運営の予算や人事の権限が与えられる事は、責任も伴う事は当然の事である。又、大学間の競争は益々激しくなるであろう。この機会に本当に立派な人材を育てる事によって、筑波大学はこれだという特色と伝統を早く確立する事を願っているものである。

うえだ ゆたか